
剣と刀と刃の物語

倉岡玉由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と刀と刃の物語

【Nコード】

N2646C

【作者名】

倉岡玉由

【あらすじ】

世界の終局…。

そして始まった新たな世界。

そこは、剣と刀と刃のみが力の世界だった。

序章

西暦2XXX年：度重なる核戦争、止まることを知らない環境破壊。それらは、人類世界の崩壊をもたらし、すでに地上は人間の住める世界ではなくなっていた。

ただ、幸いなことに人間達は生きていた。

地下に逃れ、文明の持つ一切を捨て、原始的な生活を試みることで、そして彼らは待った。

地球の力によつて再び地上が人間の住めるようになるまで。

そして、それはある日やってくる。

核戦争の影響と地殻変動によつて現在の地形はほぼ失われた。

人類は名前も知らない大陸に進出する。

すでに歴史すら忘れられた頃、人類は再び定住の地を大地に求めたのだ。

ただ、そこにはすでに新たな住人がいた。

後に獣人と呼ばれる動物たちが進化した存在は、大地を統べる程の知能と動物由来の力を持っていた。

そこから惨い戦いが始まった。

人とそれ以外の者たちとの戦いが。

圧倒的な力をもつ獣人達の前に、人類は苦戦を強いられた。

戦況を変えたのは、ほんの些細なことだった。

地震、洪水、嵐。

天の救いか、悪魔の仕業か。

いずれにせよその戦いに勝ったのは人だった。

そして人類の新たな歴史が幕を開けた。
彼らがとつたのは、皮肉にもかつて人類が忌み嫌ってきた独裁とい
う形だった。

ここに『ヤンエイ帝国』が勃興する。

ヤンエイ帝国は兄であるヤンソンを国王、弟のエイドリアンを執政
とした統治体制から来た国名であった。

二人は先の戦争の英雄で、その強いリーダーシップを評価され独裁
者に担がれた。

二人は当初より仲が良く帝国は、繁栄の一途をたどる。
ただ、平和は長くは続かなかった。

ある日を境に、兄弟はお互いの憎みあうようになる。

エイドリアンは獣人たちと協力しようとする頃から考えていた。

しかしヤンソンはそれを許そうとはしなかった。

そして対立は、さらに深い対立を生んだ。

ヤンソンは、エイドリアンを執政から更迭し地方知事職に左遷した。
これがヤンソンの犯した失敗だった。

エイドリアンが左遷されたのは、獣人の最も多く住む地域であった。
エイドリアンは彼らと結束しクーデタを起こす。

結果からいえば、クーデタは失敗だった。

ただそれ以上に悲惨な事態をもたらした。

ヤンソン派とエイドリアン派の世界を二分する戦いが幕を開けたの
だ。

戦力は互角で戦いは均衡。

長い長い戦いはついに決着がつくことはなかった。

そして人類は気付く。

そもそも独裁という体制に問題があったことに。

そして恒久の休戦と大陸を百の国に分割する『セラミド憲章』が制定される。

時の学者エインが、歴史を数え始めて109年のことだった。

ただ和平は長くは続かなかった。

セラミド憲章によって分割された領土は、とても均等とは呼びがたいものだった。

そして国と国との間で小さな争いが起き始める。

後に『分割摩擦』と呼ばれるそれは、とあることを境に急激に進展していく。

エイン歴122年。

分割された国の一つであるロウハン。

時の国王キングⅡザⅡレイ（キングⅡレッド）は古い文献を発見する。

エイン歴124年。

レイは文献を解読し、ここに新世界初の刀剣と呼ばれる『レイナイフ』が完成する。

そしてここから刃によって歴史が動いていく。

様々な刀剣が作られ、分割摩擦はさらに進展していく。

各地で刀剣を用いた大規模な戦いが起き始める。

そしてエイン歴196年。

歴史を動かしてきたヤンソン派の国である『ヤン帝国』がいち早く

刀剣を導入し、世界最強の軍隊を作り上げたセラ公国によって滅亡する。

続く207年。

セラ公国はエイドリアン派の『エイ帝国』を滅ぼし、世界一の大国になる。

セラ公国の国王ダリアスは、エイ帝国の女王を妃にし、自らをセルリアン・ダリアス1世と名乗るようになる。

同時に大胆にも国名を恒久の和平を約束したセラミド憲章より、セラミド王国と変えた。

そして以後セラミド王国の武力による和平が世界を包むことになる。

エイン歴500年。

世界はエイン歴を祝い『世界500年停戦協定』を結ぶ。

無論セラミド王国は調印していないものの、世界各国がこれに批准しているため以後500年真の平和がもたらされることになる。

さらに624年。

刀剣の誕生から500年が経過し、刀剣より殺傷能力のある武器、兵器の開発、製造を禁止する『刀剣条約』が各国により締結され、戦禍の広がりが未然に防がれることになる。

エイン歴1043年。

剣士及び鍛冶師が免許制になり、同時にそれらの統治機関が創設される。

世界最強の五剣士を頂点とした剣士連。

鍛冶師の最高位『特級名工』の集まりである名工会を頂点とした名工連。

これらの誕生により刀剣保持者の数は激減し、さらに和平への道が築かれることになる。

エイン歴1048年。

当時の世界最強剣士であり、剣士連初代会長のツキノワが死去し、同時に弟子のシロクマが世界最強並びに剣士連二代目会長に就任する。

1050年代から、無免許剣士である犯剣者、無免許鍛冶師である闇名工が活動をはじめようになる。

彼らの活動は一般市民に被害を及ぼすようになり、これを重大視した剣士連は下部組織に、剣士による治安維持組織である剣士連警備隊が創設される。

翌51年には、諜報・暗殺部隊である暗剣隊が創設され、犯剣者や闇名工による大規模な犯罪行為は回避されるようになる。

エイン歴1072年。

刀剣のさらなる研究開発のため、剣士技術局が創設され、同時に剣士・名工の免許発行組織になる。

74年、剣士の最下位である五級剣士による第一回剣術大会『五級剣士剣術大会』が開催される。

これは、下級剣士の育成を目的とし以後四年に一度開催されるようになる。

エイン歴1095年。

セラミド王国が、周囲の小国に対して侵略戦争を仕掛ける。

国際的な非難を受けるも、国王セルリアンⅡダリアス八世はこれを無視し現在に至る。

現在…エイン歴1098年

新たな剣士の誕生

大陸の最南端に位置する、夕霧の里。

森林を中心とする、穏やかな国で林業や牧畜が盛ん。

そんな里の首都セツヒに一人の少年がいた。

金髪というよりもオレンジ色に近い頭髪に、大きめのゴーグルを頭につけ、剣士として基本的なスタイルに刀を腰にさしている。

彼の名前は宮本ダイスケ。

えっ？俺？

俺はまあちよつとした剣士でね。

あつ、正確には元剣士かな？

そのうち本編にも参加する予定だから気長に待つてよ。
じゃあ本編ね。

彼の名前は宮本ダイスケ。

剣士を志す、14歳の少年。

分け合つて両親とは死別している彼は、剣の道を自分一人で学んでいた。

そして、今日道場破りをもって正式な剣士になろうと考えていた。

剣士になる方法は幾つかある。

まず一般的なのが剣士連主催の試験を受験し合格すること。

剣士の最高位である特級剣士は、特例で免許を授けることができる。
そして異例中の異例がこの道場破りである。

つまるところ、道場破りは不可能なのだ。

道場には基本的に四級剣士以下の剣士が修行に励んでいるが、免許を持たない剣士見習いの身で十九の剣士に勝利することはかなり難しい。

その可能性は1%にも満たない。

なぜダイスケが、道場破りに挑んでいるのかはわからないが、少なくとも断言できる。

彼は今日、剣士になることはできないだろう。

そうこう言っているうちに、彼は道場の前に立っている。

『ここが本願寺道場か。』

そう言って彼は、門を叩く。

『たのもう。』

ゆっくりと門が開く。

中からダイスケと同じ年くらいの少年が出てきた。

『貴様、何者だ?』

少年はおかっぱ頭に鋭い目つき。

身なりは整っており、腰には木刀をぶら下げている。

どうやら、裕福な家庭の子供らしい。

ダイスケが口を開く。

『俺の名前は宮本ダイスケ。道場破りにきた。』

するとおかっぱ少年は、ちらつとダイスケの全身を見回して尋ねた。

『貴様、階級は?』

ダイスケは懐から一枚のカードを取り出し、おかっぱに見せた。

カードにはこう書かれている。

【刀剣所持許可証（仮）】

これは一時的に刀剣を保持することを許可するカードだ。

僻地や戦地を通過する旅人やダイスケのような道場破りに向かう者

に一時的に交付される。

カードを見たおかつばはニヤリとして言った。

『いいだろう。貴様の挑戦を受けて立とう。』

そういつて、彼を道場の中に招き入れた。

道場は想像以上に豪華な造りだった。

夕霧の里は裕福な国ではないが、この道場はそれなりに栄えているようだ。

道場の中には10人ほどの見習いと思われる者達が並び、ダイスケとおかつばの様子をうかがっている。

するとおかつばが彼らに言う。

『コイツは道場破りだ。今から俺様がコイツの挑戦をうける。』

そういうと、たてかけてあった煌びやかな刀を手にとる。

おかつばは中央に歩み出ると、ダイスケを招いた。

ダイスケはそれに応じ中央へと歩み出ようとする、一人の見習いがダイスケに近寄ってきた。

『あの〜、やめたほうがいいですよ。』

そう言い終わるかどうかというところで、おかつばがその見習いを殴り飛ばした。

『貴様、何余計なことを言っている。これ以上なにかしてみろ。ただじゃ済まさないぞ。』

見習いは怯えて道場の隅のほうへ下がってしまった。

ダイスケは不思議そうにその様子を見ていたが、しっかりとおかつばを見つめなおして、刀を握る手に力を込めた。

おかつばは先ほどとは違う見習いに審判をやるように申しつけて、

ひとつだけルールを告げた。

『審判役が止めるまでもしくは、どちらかが降参するまで試合は続行。』

審判役が何か言いたげな表情をしていたが、おかつぱがにらみを利かせると、仕方なさそうに言った。

『それでは、両者刀に手を。』

このとき審判役が言いたかったことはたぶんこれだろう。

『相手を傷つけてはならない。』

これが道場破りのルールであることは、たぶんダイスケは知らない。おそらくおかつぱは、あえてこれを告げなかった。

あえてダイスケを傷つけるために。

『し合え。』

審判役の声が響く。

先手を取ったのはおかつぱだった。

刀を抜くと同時にダイスケに突進して上段から刀を振り下ろした。

ダイスケは間一髪のところでした。

おかつぱは少し意外そうな顔をしたが、構わず幾度となく刀を振った。

ダイスケはそれを受けつつ少しづつ後ろに下がっていった。

おかつぱはダイスケが受け手に回っているのをいいことに、剣を振る。

おかつぱは力自体はそれほどでもないようだが、剣速はそれにりにあるようだ。

それが、ダイスケを後ろに下がらせている要因だろう。

ついに壁際まで追い詰められてしまった。
ダイスケの劣勢は明らかだった。
やはり見習いの剣士が、級持ちと思われる剣士には勝てない。

壁際で受け続けている大輔が、先に崩れた。
上から刀を幾度となく振るわれ、刀を若干下げてしまった。
しめたとばかりにおかっぱがダイスケの首元目掛けて、横一線に刀を振るった。

『しょ、勝負はあつた。』

審判役の声がこだました。

おかっぱの額から一筋の汗が流れた。

勝ったのはダイスケだった。

誰もが、ダイスケの敗北とおかっぱの勝利を確信した。

ダイスケは1%の壁を破って、上級の剣士を破ったのだ。

横一線の刀が振るわれたその時、ダイスケはとっさに腰を落とした。
横一線に振るわれた刀はスパッと壁に突き刺さり、ダイスケは刀を上に振り上げた。

おかっぱの刀の刀身は砕け、勝負はついた。

ダイスケは狙ってこれをやったわけではないだろう。

ただ勝負は時の運と言えればそれまでだが、一寸の違いなくこれは勝利だった。

そしてこの時だった。

後に世界にその名をとどろかす剣士が誕生した。

彼の名前は宮本ダイスケ。
新たな剣士の誕生だ。

新たな剣士の誕生（後書き）

【宮本ダイスケ】

- ・ 剣士を志す少年
- ・ 14歳
- ・ 右利き
- ・ オレンジの頭に大きめのゴーグル

出会い

ダイスケは勝利の余韻を確かめるように、しっかりと一度頷いた。見習い達は黙って、その様子を見ている。

誰一人その場から動くこともできず、瞬きすることすら躊躇っていた。

それほどダイスケの成し遂げたことは脅威的なことだった。

ようやくダイスケがおかつぱの喉に向けられた刀を降ろした。

そしてスツと刀身を鞘に収めた。

おかつぱはいまだに何が起こったのかわからないといった様子で、ただ口を大きく開けている。

審判役の見習いがおかつぱに近寄り、そつと肩に手を置く。

『本願寺さん、終わりだ。もう終わったんだよ。』

おかつぱこと本願寺は刀を床に落とし、その場に腰から座り込んでしまった。

道場にはおかつぱが落としたりした刀の音が響く。

ダイスケは歓喜と興奮を押し殺して、おかつぱに声をかける。

『ありがとう。良いし合いをさせてもらった。』

あんたの名前を聞かせてくれ。』

そしてゆっくりと手を差し伸べた。

おかつぱは悔しさを滲ませた声で、下を向いたまま答える。

『おつ…俺様は…本願寺。本願寺キンカク。』

そう言い終わるかどうかのところで、キンカクは床に落ちた折れた刀を握り締めた。

そしてダイスケの手をとると、刀をダイスケに向けて突き立てた。

しまった。

ダイスケの脳裏にその言葉が過った。

距離からして、ダイスケがいくら素早く抜刀しても間に合わない。その時だった。

『こらあああ！！』

道場の空気が一瞬にして張り詰め、そして再び静寂にかわった。キンカクの刀の切っ先はダイスケに突き刺さる寸でのところで、止まった。

本願寺がゆつくりと道場の入口のほうを向いた。

ダイスケは本願寺の手を離すとキンカクから距離をとって、同じように道場の入口を見た。

そこには、一人の剣士の姿があった。

頭には黒いバンダナ、目元には丸いサングラスが光る。

鼻の下には黒い髭を生やし、上半身はいかにも鍛えられているという雰囲気、筋骨隆々ぶり。

その上半身には素肌にはシャツを一枚羽織っているだけ。

ちなみに季節は春先。

そして腰にはつばのない種の刀を差している。

歳は若くはないが、おそらくかなり上級の剣士であろう。

ダイスケは一瞬で悟った。

その風貌はまさしく歴戦の剣士であり、自分の遙か彼方に立っているであろうその男の実力を。

そして同時にこの剣士の一喝がなければ、今頃自分はこの床に血まみれで突っ伏していたということ。

ダイスケが口を開こうとする前に、剣士が口を開いた。

『キンカク、これはどういうことだ。説明しろ。』

その声は怒りにも似た強い意志が込められていた。

尋ねられているのはキンカクに他ならないが、ダイスケをはじめ見習いたちの間にも怯えに近い緊張間が立ち込めている。

キンカクが口を開けずにいる。

少しの沈黙があった後、審判役の見習いが口を開いた。

『山本先生、これは本願寺さんとこちらの方との決闘であります。

ただ…勝負はすでについたのですがキンカクさんが…その…』

『汚い手を使ったな。』

『…はい。勝負が終わったにも関わらず、刀を握られて…。』

この見習いは怯えていたものの、自らの意思で話していた。

『なるほど。でしてそちらの少年。君は?』

ダイスケは相手の目を見ようと試みたが、サングラスがそれを拒んだ。

仕方なく話し始める。

『俺の名前は宮本ダイスケ。道場破りに来た。』

『宮本?』

山本の様子が一瞬変わった。

それはすぐに元に戻り、再び話し始めた。

『どうやら君にはうちの弟子が迷惑をかけたようだな。実を言つとこの道場は昔の友人のものでね。その友人が病に倒れてから、週に一度ばかり訪れては指導をしていただけだな。ところで君は道場破りのルールを分かっているのか？』

ダイスケは知らなかった。

ただ、先ほどキンカクに言われたことを思い出した。

『審判役が止めるまでもしくは、どちらかが降参するまで試合は続行。』

山本はそれを聞くと周囲の見習いやキンカクを睨んだ。

『実はルールはそれだけじゃないんだよ。』

まず相手を傷つけてはならない。

そして二級剣士以上の立会を必要としているんだ。』

ダイスケは絶句した。

死の境地を乗り越えて手に入れた剣士の座。

それはここに倒れているキンカクの仕掛けた嘘。

ただ決して悲観はしていなかった。

偶然かもしれないが、確実に自分の剣が通用することがわかった事は自分自身に大きな自信を与えていた。

続けて山本が口を開いた。

『本来ならここでもう一度機会を与えるところなのだが、こんな事態になってしまった以上、それはできない。』

もし君が望むなら、ともに俺の道場に来ないか。

君と同じように剣士を目指す者達が修行に明け暮れている。

そして来月に迫った試験を受けないか。』

『行くよ。行かせてくれ。』

ダイスケには迷いがなかった。

自分と同じような剣士の見習いたちと修行をすることは、自分を高める上で必要かもしれない。

今の自分はただ剣士になろうと焦り、よく調べもせず道場破りに挑んでしまった。

先に為すべきは、実力をつけることなのに。

『いいだろう。俺の名前は山本武。』

たった今から俺はお前の師匠だ。覚悟はできているか？』

『もちろん。』

こうしてダイスケは人生で初めての師匠という存在に出会った。

最強の剣士を志す上で、自分より優れた剣士に師事することは有意義なことだ。

ダイスケは偶然にも武に命を救われ、そして幸運にも武はダイスケの師匠になった。

ただ、出会いはいずれ別れを生むということを忘れてはならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2646c/>

剣と刀と刃の物語

2010年10月31日00時43分発行